

等身大のASEAN像とは？

鈴木早苗

1997年10月発行の『国際政治』（116号、日本国際政治学会）は「ASEAN全体像の検証」という特集を組んだ。この特集のなかで黒柳米司は「ASEAN全体像の検証とは、なによりも過大評価と過小評価のいずれにも傾斜しない『等身大のASEAN像』を描く作業に他ならない」と述べている。冷戦後のASEANの発展にともない、「等身大のASEAN像」を描くことが難しくなっている。

●ASEANの発展

1967年に設立されたASEAN。その組織名「東南アジア諸国連合」（Association of Southeast Asian Nations）は、ASEANが一部の東南アジア諸国によって設立された事実と必ずしも一致しない。冷戦期、東南アジアはASEANを構成する反共諸国とベトナムなどの共産主義国とに分断されていた。ASEANより以前にも地域組織が設立あるいは構想されたが、どれも長続きしなかった。実際、ASEANも設立直後、マレーシアとフィリピンの対立により存続の危機に立たされている。しかし、ASEANは生き残った。冷戦期、分断された東南アジアの安定に対してASEANは十分な役割を果たせず大国に翻弄されたが、加盟国間の対立の制御という点で一定の成果を上げた。冷戦期のASEAN研究はこの点で一致し、ASEANの取り組みを冷静に分析した。存続さえ危ぶまれたこの時期のASEANに過度な期待は抱かなかったのである。ASEANの活動や役割が限定的だったこの時期、ASEAN研究は「等身大のASEAN」をとらえていたし、とらえることができたといえる。

冷戦後にASEANは平和と繁栄の東南アジアをもたらした立役者と称されるようになった。第1に、冷戦期にベトナムのカンボジア侵攻に対する政策を打ち出したことでASEANは地域機構として注目を浴びた。

第2に、敵対していたベトナムに続き、ラオス、ミャンマー、カンボジアが次々にASEANに加盟した。東南アジアは、他地域と比べ、平和な地域であり、その担い手としてASEANが注目を浴びた。第3に、ASEANは広域の地域協力にも重要な役割を担うようになる。1994年、アジア太平洋地域で初の安全保障協力枠組み、ASEAN地域フォーラム（ARF）が設立されたことはその典型である。第4に、東アジアの奇跡に代表されるアジア地域のめざましい経済発展がみられた。域外からの投資呼び込みのため、1992年にはASEAN自由貿易地域（AFTA）の形成が合意された。ASEANおよび東南アジアは、経済および政治安全保障において注目されたのである。

●過小評価と過大評価のはざま

こうした発展の結果、ASEANに対する期待は高まり、ASEAN研究には、期待しすぎるゆえの過小評価と、期待を膨らます過大評価という2つの傾向がみられるようになった。

過小評価は冷戦期からみられた。代表的な論者LeiferはASEANが域内関係の構築に一定の役割を果たしたことを評価しつつも、ソ連や米国、中国などの大国に対する脅威認識の違いから、対外政策の一本化を実現できず、その結果、影響力を行使することができないと主張した（参考文献①）。ベトナムのカンボジア侵攻に対しても、ASEANが国連で展開した外交はなんら実質的な効果をもたらさなかったと説明する。Emmersは、1990年代以降の南シナ海の領有権問題にしても、ASEANは実効支配を展開する中国の行動を制御する影響力を持ち合わせていないとし、ASEANが主導するARFも機能不全に陥っていると主張する。また、ASEANが紛争解決手続を整備しても、その手続は十分に活用されていないことを挙げて、ASEAN

の役割を消極的に評価する（参考文献②）。

一方、ASEANに対して高い評価を下す論考も登場した。この論考は国際関係論のアプローチとして注目を浴びたコンストラクティビズムの影響を強く受け、規範や価値、アイデアの存在が協調的行動をもたらすと主張する。具体的には、武力不行使や内政不干涉、平和的紛争解決、非公式な協議、コンセンサスによる意思決定といった規範や手続きがASEANでは重視されているために、ASEAN諸国間の協調的關係や東南アジアの平和が実現しているとするものである。過小評価の論考では軽視されたこれらの規範や慣行を、この論考では「ASEAN Way」と呼ぶ。代表的な論者Acharyaは、ASEAN WayがASEAN加盟国間だけでなく、域外国、特に中国に対しても有効に機能したと主張した（参考文献③）。中国はARFに加盟することでASEANの規範を受け入れたとするものである。ただし、これらの論考は、規範の内面化が実際になされているかについて実証分析を欠いている。

このように、ASEAN研究が描くASEANは、過小評価と過大評価のはざまにゆれている。1990年代以降、ASEANでは多くの問題領域で協力が進められるようになったために、さまざまな角度からASEANを評価する必要性が生じた。その結果、「等身大のASEAN」を描くことがますます困難になってきたのである。参考文献④は、この点を念頭に置いたうえで、1990年代のASEANの変容を実証的に明らかにした良著である。

●ASEAN共同体の形成

アジア通貨危機とインドネシアの民主化を契機として、ASEANはさらに新たな動きをみせるようになる。政治安全保障共同体・経済共同体・社会文化共同体から成るASEAN共同体の形成を目指したのである。2015年末、形式的にはASEAN共同体の設立が宣言されたが、共同体作りはまだ途上である。簡潔にいうならば、政治安全保障共同体は民主主義や人権といった規範の重視と非伝統的安全保障の追求、経済共同体は経済統合の深化、社会文化共同体は社会開発、貧困の是正、公衆衛生、環境汚染対策、教育などの分野で取り組みを進める。ASEAN共同体とともに打ち出されたのが「人々のためのASEAN」である。つまり、これまで政府間協力あるいはエリート間の協力にとどまっていたASEANが、人権や公衆衛生、社会開発な

ど人々の生活に関わる問題を扱おうというものである。

こうした取り組みに対しても、引き続き、過小評価と過大評価の論考がせめぎあっている。ASEAN共同体を作るという一大プロジェクトはASEANにどのような変化をもたらそうとしているのかについては、現時点では評価しにくい。これに関して、参考文献⑤と⑥は、3つの共同体についてその内容を解説するとともに、目標を達成するためにはさまざまな課題があることも指摘する。他方、地域機構として確固たる地位を築いたASEANを他の地域機構と比較してみようという取り組みもみられるようになった（参考文献⑦、⑧）。ASEANのこれからの動きが注目される。

（すずき さなえ／アジア経済研究所 在コペンハーゲン海外調査員）

《参考文献》

- ① Leifer, Michael, *ASEAN and the Security of South-East Asia*, London: Routledge, 1989.
- ② Emmers, Ralf, *Cooperative Security and the Balance of Power in ASEAN and ARF*, London and New York: RoutledgeCurzon, 2003.
- ③ Acharya, Amitav, *Constructing a Security Community in Southeast Asia: ASEAN and the Problem of Regional Order*, London and New York: Routledge, 2001.
- ④ 山影進『ASEANパワー——アジア太平洋の中核へ——』東京大学出版会、1997年。
- ⑤ 山影進編『新しいASEAN——地域共同体とアジアの中心性を目指して——』アジア経済研究所、2011年。
- ⑥ 鈴木早苗編『ASEAN共同体——政治安全保障・経済・社会文化——』アジア経済研究所、2016年。
- ⑦ 鈴木早苗『合意形成モデルとしてのASEAN——国際政治における議長国制度——』東京大学出版会、2014年。
- ⑧ Acharya, Amitav and Alastair Iain Johnston, *Crafting Cooperation: Regional International Institutions in Comparative Perspective*, Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2007.